

ひなまつり

# 歴史回廊

第8部「芸備孝義伝」の世界 ⑥

にこやかに笑うおほあきさんとお嫁さん。「お母さん、おいしい」飯が炊けましたよ」「そうかい、それじゃいたたくとするかねえ」。そんなほほえましい会話が聞こえて来そうな絵だが、実は全く違う場面なのだ。

### ■黒焦げになった糸

御調郡吉和村（現在の尾道市吉和町）の源八と妻ひな。二人は百歳を超す母親への孝行によって文化八（八二）年に広島藩から褒美として米五俵を受けた。特別なご褒美したわけではない。老いた母親への細やかな心配りを欠かさなかっただけだ。そんなある日、事件が起こった。

源八夫婦はわずかな田んぼをつくっていたが、それだけではとても暮らしていけない。そこで生計の足しとして、ひなは木綿の糸を紡ぎ、それ

を織って布にしていた。紡いだ糸はそのままでは弱いので、燃りを安定させ余分な油分を除くために釜で煮る。これを「燃りどめ」という。

その日、ひなは燃りどめをしよと、紡いだ糸を釜に入れたが、ふと用事を思い出して田んぼに出かけた。しばらくして戻ると、氣を利かせた母親がまさか火をたいて燃りどめをしておいてくれたという。「お母さんどうもありがとございます」。ひなが釜のふたをとってみると、中には水を入れずに火をたいたため、黒焦げになった糸の残骸が……。ここに描かれているのはその瞬間である。

### ■心抑えてほほえみ

ひなは泣きたい気持ちを抑えながら「こりほほえむと、「お母さんのおかげでいい具合に煮えました」と言いながら釜の中の糸を隠した。そして「そり」と友人から替わりの糸を買って染め、それを織って母親に見せたというのだ。

それにして、母親に心配させまいとする気丈なひなさんです。けれど、「動揺を隠してほほえむお嫁さん」と、それを知らずに無邪気に笑うおほあきさん」という微妙な一瞬を描き切った絵師山野峻峰斎もすこいなと思

土曜日に掲載します



（広島市郷土資料館学芸員・村上宣昭）